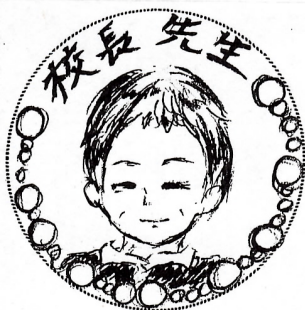


学校だより 希望の鐘

ひとつのつぼみはいちどしかひらかない



八戸市立 小中野中学校

平成28年11月29日(火)

No.66

文責：校長
工藤聡

なぜ言われる前に勉強をしないのか

東京のある団地での話だそうです。

空き地に美しい花が咲いていた。庭のない人のせめてもの楽しみであろう。空き地の雑草を取り、土を耕し、種をまき、水をやって育てたのだ。

朝に夕に、その花のかたわら（カタワラ：そば）を人々は喜んで語りながら通り過ぎた。

「まあ、きれいな花。」

「まあ、よく咲きましたねえ。」

自分のふるさとの庭を思い出す人もあった。小学校の校庭にこんな花があったと思う人もいた。花は、その団地の人々にとって、心のなぐさめであり、うるおいであった。花は次々に咲き、人々は残るつぼみを数えて、あとしばらくはこの花によって、楽しむことができるとひそかに喜んだのである。

ある朝、その花のいくつかがむしり取られて、地に捨てられていた。

「誰がこんなことを。」

人々はその心ない（ココロナイ：思いやりがないこと）業（ワザ：しわざ）に怒り、ある一人が次の機会をねらっている子供を見つけた。近くの幼稚園の子であった。美しく咲いているものをうばう喜びに目を輝かせている子供に向かって、その人が諭し（サトシ：サトス：よくわかるように言うこと。）た。

「この花はみんなが見て喜んでいて。そういうことをしてはいけない。」

子供はみるみるペソをかいて、自分の家のほうへ走り去っていった。

あくる日、子供をたしなめた（タシナメル：いましめること。しかること。）人は、一人の若い主婦によびとめられた。

「あなたですか。うちの子供をいじめたのは。」

「いじめたものではありません。注意したのです。」

「よけいなお世話です。だいいち、子供が取りたくなるような場所に、誰が花なんか作ったんですか。こちらこそ迷惑です。」

目をつりあげて、くちびるをとがらせて、にくにくしげに言い捨てて去った主婦は、他者への愛を忘れたその心の貧しさが、とげとげしい表情によく表れていて、思い出しても寒気立つ（サムケダツ：おそろしさで寒気を覚える。ゾツとすること。）と、その人は語ってくれた。

上の文を読んで、みなさんはどんな感想を持ちましたか。花を取った子供には、罪はないと思います。自分がやった行為がどういうことか理解していないからです。問題なのは、その母親なのです。自分の子供が他人にしかられたということだけを取り上げて、なぜしかられたかを考えていないのです。もっと冷静に、そして子供の将来のことを考えればわかることなのに…。

3年生は、いよいよ高校受検を前にした大事な時期に入ります。そんな3年生のみなさんも、もしかすると同じなのではありませんか。受検勉強の必要性はわかっているはずですが、イヤでも、勉強しなくても、中学3年生であれば必ず訪れる試験（シレン：決心、技量などを試すこと。またその苦しみ。）だということもわかっていますね。そして、どうすればいいのかも、当然頭にはいっているはずですが、しかし、みなさんはわかっているのに、家の人に「勉強しなさい」と言われると、その意味よりも、言われたことだけに対して腹をたてていませんか。その時のみなさんは、上の文の母親と同じです。きっと、目をつりあげてくちびるをとがらせた、とげとげしい表情になっていると思いますよ。

ここで、私がこれまで何回か言っていることを繰り返します。「成績がいい」か「悪い」かなんて、大人になってしまえば、あまり大きな違いはないのです。それよりも、受検を一つのハードルととらえ、苦手でイヤな勉強でも精一杯がんばってみることに意義があるのです。こういう機会に、必死にがんばることを覚えておけば、将来どんな困難なことにぶつかっても、必ずそれに立ち向かっていく精神が養われるのです。そのために、今、がんばってみるのです。